

# 村島帰之関係書簡

木村和世

## はじめに

ここにあげる書簡類は、大正・昭和初期において労働記者として第一線で活躍した故村島帰之氏が所蔵し、同氏の死後、同子息村島健一氏によつて所蔵・保管されてきたものである。

村島帰之はこれまで労働記者の草分けであるとか、または明治期の横山源之助を彷彿させるルポ・ライターであるとかの評価が先行してきた。しかし、村島はそれ以上の関わりがある時期の関西の労働運動に及ぼしている。それは、一九一五年から一九三七年、二二年間住み慣れた関西の地を離れるまでの、大阪毎日新聞記者の時期に集中している。特に一九二一年の労働運動の激化の時期には、村島の自宅において、何度も関西労働同盟会の理事会や、秘密会が持たれている。村島はこの時期には確実に労働運動と社会のパイプ役を果たし、労働争議の背景や、その内容を的確に報道するとともに、賀川豊彦、西尾末広らの活動家を世に知らせた。また、この

時期、松岡駒吉とも頻繁に書簡をかわしている。その意味において、これらの書簡類は、戦前、戦中における中間層の意識の断面をうかがわせるとともに、労働運動の展開を見る上で貴重な文献といえる。

これらの史料の活用を快諾して頂いた村島健一氏に感謝する。なお、書簡類の判読については、津田秀夫先生の御指導を賜わった。

村島帰之は、一八九一年一〇月二〇日、自由党代議士（のち無所属）滝口帰一の三男として生まれた。一九一四年、早稲田大学を卒業する。在学時代は、尾崎行雄を中心とした立憲青年党に加盟。一九一五年、大阪毎日新聞社に入社する。大毎社長本山彦一から大きな影響を受けた。一九一六年、内国通信部に属し、職工問題を担当。一九一七年、大阪府救済事業研究会の月並例会の席上、小河滋次郎より賀川豊彦を紹介される。一九一八年四月、賀川を新聞紙上でとりあげた。

(一) 八原文ノママ  
本山彦一

一九一九年八月、村島は大毎神戸支局へ転勤。同年九月友愛会鉄工部機関紙「新神戸」<sup>(一)</sup>のち、「労働者新聞」と改名。の編集顧問となる。一九一九年九月、川崎造船所のサポータージュ闘争発生。このサポータージュという戦術は、村島が示唆した。

一九二〇年七月、神戸支局より大阪毎日日本社へ復社。この頃、たびたび村島の自宅において関西労働同盟会の理事会もしくは秘密会が開催されている。一九二一年五月、村島は病床についた。一〇月、回復。この間に、労働運動は激化していった。賀川の紹介で杉山元治郎に出会い、日本農民組合の結成に助力。この年のおわり頃から、再び健康を害し入院。一九二三年、宮沢しづゑと結婚。

一九二四年四月、東京日日新聞に転勤した。同年受洗。その後、日本フェビアン協会の委員、政治研究会の中央執行委員などを歴任。同九月、大毎本社へ復帰。一九二五年、労働総同盟の分裂に際し、調停に努めるが失敗。一九三七年、大毎を退社。同年、社団法人白十字会の総主事に就任。一九四六年三月、私立平和女学校を開校。一九四九年、財団法人平和学園を創立。一九五〇年頃より病臥する。一九六五年一月一三日七三歳で、その生涯を閉じた。

(封書 表書)  
一、大阪市外天王寺東金塚一〇二六

村島婦之様

親展復

(封書 裏書)  
大阪府下泉北郡高石村大字今在家(濱寺公園羽衣松側)

(再々之心事告白等と評承致し)

<sup>(八原文ノママ)</sup>

貴翰拝見久々御病氣之處漸次御快復之段誠に慶賀すべき事ニ可存候 小生ニも大ニ悦居り申し候 扱今度之御書面にて御病氣之原因も有之將來御覚悟之事も急かす怠らず静かに進路を取ら連度希望致候 小生今夕中村三徳君同道上京来る十三四日帰阪之筈ニ付其上にて拝眉□□申上先ハ 拝答迄上度事ニ候 頓首 九月十七日 本山拝  
村島仁兄 坐石

(注) 本山彦一は大阪毎日新聞社社長。

二、(葉書 表書)  
兵庫縣西の宮町郵便局裏

村島婦之様

(葉書 裏書)  
東京市芝區三田四國町二 大日本労働総同盟

友愛會

本部

松岡駒吉

村島婦之様 先達は御病キ御尋ね致まして御氣の毒でした。その後御容態は如何です蔭ながら心配して居ます どうぞ早く御全快になつて吾々の運動の爲めに御助力下さる様願ひます。当地では相変ずごたくとして居ます 本会の東京聯合も此の様子では一寸ためです それに大阪の盛な事は驚き可きもので御病中でも既に御存じの事と想像しては居ますがほんの先達から二千名程の新入會員があつた様子です。豫ての御援助に依て牙が出た様です、殊に西尾さん

を聯合會に迎た事は実に幸でした。お天氣はよし臥床して居られるのも嫌でしょう。どうぞ御全快を禱ります。草々

(注)大正十年六月三日のスタンプあり。

三、<sup>(兼書 表書)</sup>兵庫縣西の宮町郵便局裏

村島婦主様

<sup>(兼書 表書)</sup>

大阪市北区西の田江成町二九二

大阪聯合會内

松岡駒吉

昨日毎日の奥村さんに会ひまして大兄の御病状を伺ひましたわりよろし以との事で先づ安心して居ました今日御手紙を頂きまして有難ふ御座ひます。斯様な際に大兄の御病氣は残念で堪りません。小生は悪運強く不起訴となりました。西東藤その他五名の同志特に工場に居る人と藤岡君に同情に堪へません。自分計り釈放されて心苦し以のです。が十七日に出ると直から活動を開始しました。それから鈴木會長は十三日に是非帰京する豫定で来たのですが小生までもやられましたので結局滞坂して貰ふたのでしたが昨夜兎も角一應帰<sup>マ</sup>て貰ひました、何れ事件が済みましたら御伺ひし度以と存じて居ます。鈴木さんも御見舞に行き得なかつたので後で小生に御見舞して呉れと申して居ました。どうぞ御身を大切に願ひます。

(注)大正十年六月一九日のスタンプあり。「奥村」とは毎日社長・奥村信太郎であらうか。

四、<sup>(兼書 表書)</sup>日本大阪市大川町 大阪毎日新聞社

村島婦之様

拝啓サボやストライキを、天どんやサンドイッチの様に御互心得て居たが、そのサンドイッチのために船が出なくなり、霧のロンドンに立往生をせねばならぬ小生、実に因果應報とは此事也、丹後の宮津あたりで出船をとめられたら意気な世界が現出するのだが、引つ張らうにも袂のない洋服の品では、呑気に牛歩的に、マイナーと政府の会合が続けられるのを、新聞で見で一衣一憂するだけの事、何しろ町へ出ると新聞を買って、往來で見出しだけ見て、出船期の判断をするのですから氣の毒□□□□——併し英國のマイナーは仲々力がある、実力がある、この実情は出船をとめられた御陰ですすく分るのです、——閑話休題、僕は去十三日(十月)に大陸から倫敦に出て、十六日に上京君の宿を訪問して初めて大兄の帰社を知り、又慶ちゃんの京都入りを知ったのです、慶ちゃんが京都に行ったら、京美人大騒ぎでせう、もし夫れ大兄に至つては、神戸に居た時より一層便利になつて活躍思ふべし、但し、夜ふかしは毒ですよ、御大切になさい、

十月廿五日 ロンドン

鴻

(注) 記名の「鴻」とは岡崎鴻吉のこと。岡崎は村島の上司であり、神戸支局長であつた。これは一九二〇年頃と思われる。

五、<sup>(封書 表世)</sup>大阪毎日新聞社気付

村島婦之様

親展

<sup>(封書 裏世)</sup>東京都芝区三田四國町二ノ六

日本労働同盟會 大正拾五年貳月貳日

村島大兄

駒吉

村島さん、非常に無沙汰して失礼して居ります。二三来、賀状さゝも差上げないで、そして永く御目に掛る機會もありませんでしたから先日御手紙を頂きまして直様御返事を差上げ度いと存じましたが色々忙ししい仕事に追れたり且つ、少し考へて居たものですから今日まで失礼しました、村島さん。僕は兄が交らない友情を僕に持つて居て呉れられ事を信じ且つ又それを知つて居ります。殊に解放の正月号に小生の論評が掲載されて居る事は年末に友人から見せられて居ました、忙しかつた時で一寸目を通したのみでしたが 先日貴兄の御手紙を頂て。それから解放の月後れを三十銭で買ひ求めて熟読し且つ荆妻にも示して貴兄の知遇を感謝しました、村島さん貴兄は小生の苦みを公平に見て呉れて居られる。しかし餘りに厚意ある書き方二不当な讃辞を頂て実に閉口しました。そして貴兄がその他の人々西

尾兄に對しても至つて公平に此れを見て居られる事を知ります。しかし共產派の除名問題に就て『西尾兄が個人を除名して分裂を防ぎ得なかつたその目込み違い?をした責任者として引退した』と云ふ点は西尾兄の爲めに間違ひである事を御知せします。西尾兄は個人除名で分裂を避け得られると云ふ程に不聰明ではなかつたのです。そして元來、除名分裂の主張者は小生自身であり関東同盟であります。之より小生も個人のみでは濟まないと考へて小生は初めから関東に就て個人及組合を二重に除名する事を主張しました、要するに小生は 除名し 分裂した事は総同盟は元より日本の運動の爲めに実に偉大な貢獻をした事を信じて居ります。しかし 僕の確信が間違つて居て結局総同盟も日本の全運動も之れに依て□に禍されたと云ふ事になります時はそれは決して西尾君の責任ではなくて一切が小生の罪だとすでに小生は考へるなどそれ丈け熱心に主張し、西尾君は反對したのです彼れは総同盟の大勢が決定するまで反對したのです。その責任のない事をどうぞ信じて下さい。村島さん。こんな事を云ふ事は何の役にも立たない事です。しかし申し上げます。僕は□前述の通り貴兄から好意を持たれて居る事を信じ知つて居ります。しかし西尾兄は貴兄から好意を持たれて居らないと見て居ります。そして小生は貴兄が彼に好意を持たれない様に彼がしたのだと云ふ様に見て居ります。その点は彼に悪意の有無は別として貴兄に對して

寧ら相済濟ない事だと僕は考て居る 何故なら総同盟としては永く援けられ御心配を掛けて居るからです。それにしても兎も角 貴兄が除名分裂の問題を悪と見られる時に好意を持って居る私良に對してその責を問はないで持れない西尾兄に責任ある如く見れた事を残念に思ひます。村島さん 何れ僕は貴兄を御訪ねします。そして除名分裂の問題に就て充分に御談し申上なければならぬと考て居ります。その時に小生の考の間違ひがあるならば此正して頂き度いと出来るならば貴兄に理解して頂き否讚成して貰ふのであれば虫がねりません。僕は分裂を理想としそれを讚美するものではありません。その当時の現状——否今日に於てもの現状から斯くしてこそ眞の運動が起るのだと考て居ります。御訪ねしたら必ず御會ひ下さい 今から御願ひいたして置きます。何れ出掛けますから 寫眞はどうぞ御許し下さい何だか耻しいですから

六、(封書 表書) 大阪市大阪毎日新聞社

村島婦之様

(封書 眞書) 東京市芝區三田四國町貳番地

日本労働總同盟本部

貳年九月廿八日

村島婦之様

九月廿八日

松岡駒吉

拝復 御全快を御喜び申し上げます どうぞ今後充分御保養

下さいまして健康を維持して頂く様願ひます。私は幸にして丈夫で居りますが同盟の齊藤君は貴兄と同じで才子多病で実に残念に存じます。同君が頑健であつて呉れたらと詮なき事ながら絶えず念頭から離れません。殊に私共の仕事は丈夫でなければやれませんので 府縣議の選舉で労働党の優勢には感心して居ります。それに引替て社會党の劣勢に遺憾に堪へません。しかしそれに依つて来る可き総選舉の善き教訓を得ました。次には耻を雪ぎましよう。東京方面の組合運動は幸に順調に進んで居ります。しかし最近政友會の反動政策から来る庄迫は殊に信州岡谷生糸の罷業に遺憾なく現れて居りますから実に驚くものです。來年の総選舉の済ますでは特に細心の注意を拂ふ必要があります。不況氣に現内閣の選舉第一策で苦心一通りであります。

七、「善き隣人」御惠贈下され有難く存じます、

いつもながらの御力作、省みて小生などは赧顔の到りです、「どん底」から「歓樂の墓」——そして「方面委員報告」、この書は頼まれての御仕事である事は前々承知して居ますが、大兄の行路をながめる心地せずに居られませんが、それがよしや大兄の烈々たる御志でないにしても。——大兄も僕も段々年をとりましたね、大毎のあるペーヂ、それは二ダンか三ダンの記事しか奈かつたペーヂを、都市問題と労働問題だけだと悪口いはれつゝ平氣であつたのもツイ此間

のようですが、僕も「善き隣人」の一篇を喜び見るようになったのですからね又、此間大阪に参りました時、阪急で十三を通り、大兄病臥の枕頭に神戸行を御願ひした事を回想しました、世の中は、徐々ながら我々が若い頃思つた方前には進んで居る様ですね。

六月二十四日

岡崎鴻吉

村島学兄 御令闈によろしく

(追伸文) 善き隣人非売品ですが、今三冊ばかり頂きたく、実費を差上げますから、御取計らひ下さるようにな

(注) 封筒なし。文面から、一九二九年頃と思われる。

八、兵庫東西宮市千歳町

村島婦之様

東京市芝區三田四國町二番地

日本労働總同盟

松岡駒吉

昭和拾壹年貳月拾五日

村島婦之様

二月十五日

松岡駒吉

拝復

久し振りに懐しい御手紙を拝見し且つ貴兄の御心情を御察して感慨に堪へません、平素多忙に紛れて失礼のみして居ます事をしみてと相済なく存じます 仰せの通り御蔭で

やる可き喧嘩は充分やりましたので正月に弥々今月も出来上りました。微力を省みて心細くなります。実に一層の御援助を御願ひ申し上げます。斉藤君も今から大いに□て貰はなければならぬ人であつたのですが惜可き英才を失ひました。微力我々としては眞に人事の限りを盡して同君を治療せしめ且つ休養せしめて十数年或はそれで固まるのではないかと大に希望を以て居たのですが残念です。実は昨年夏から同君がどうして永くは生れないから自分の墓標を作り度い。労働経済を六年統けて七千円程の損害を小生個人の責任に於て始末して来た。その上に御氣の毒だがそれを改題して労働者の家庭雑誌し度い月三百円餘一ヶ年位ひ赤字の豫算でやらして呉れと頼みました、(一)僕は君の健康に無理されてはならぬ事 (二)途中君が萬一斃れたら折角月三四百円も投資して□も困るから止めて呉れと云ふたのでした、しかし彼れの切なる□を拒み得ず遂に之れ許して本年一月号から六年統けた「労産」を「明日」と改題して別封の如き雑誌を作りました、御覧下さい。そして不幸にして小生の心配して居た通り、一月号の編輯の済むか済まぬに臨床して一月廿四日死しました。手不足で困るが出来るだけ統けてやる考でやつて居ます、そこで折角六年間統けた「労働経済」を神戸の同志が後をやらして呉れとの事で貴兄に御送りしたのはその分です。小生は関係して居りません。その記事は鈴木さん自身の御書きになつたものか或は氏

の運動廿年から焼き直しかと存じます。仰せの通り関西方面の事は貴兄に御書きを願ふ事が最もよろしいと存じます。何れ、明日で之の記事を扱ふ様にし度いと存じて居ります。が何分にも前記の通り無理して厚稿料を拂はぬ記事のみでやうて居りますので御願ひするのに気が引けます。明日を御覽下さいまして御批評を頂けば誠に幸と存じます。御病氣も重い様に承て居ますが本年は殊の外寒くて御困りの事と御察します。何卒特に御自愛の程を御願ひいたします。奥様によろしく

敬具

九、<sup>(封書 表書)</sup>横濱市港北区中山町

(右宛名罹災ならば東京神田区小川三丁目白十字会本部気。同本部罹災ならば東京北多摩郡村山白十字会村上療養所気付)

村島帰之様

速達  
スタンパ

長野縣諏訪郡原村拂沢三四四

清水長吉様方

岡崎鴻吉

御手紙拝見、誠に有り難く存じました、実は先月末、大兄に一書差出さんと存じ乍ら昨今の憂愁にてコノ地の生活がナカ〜手紙かくに適せず。借家は廿八疊ソレが四室に分れ内二室は疊敷、他の二室は荒席(当地にて子コ小生の郷

里にては子コブクといふもの)敷きに、二家族(拙宅と娘の家族)十一人の生活、夜は電燈一箇(二千燭燈以下如し)、農耕せざる農民生活にて、小生には甚だ快適ながら、小卓二つが食卓ともなり、幼児(孫六人内三人が国民学校)の勉強机ともなり、ソノ間を見て、小生のデスクに用ゆるのですが、当地は縣下での冷害地九月下旬、ハヤ、コタツの用意をし、雨の日などは十一月始めもかくやと思はれる寒さでソナナ日には小生の如き寒がりには、寝る外なく、旁々、大兄にも大失礼しました。御海宥を乞ふ。東京の拙宅は悪運強く無事でしたがアマリ空模様兪悪なので、五月家族一部疎開、六月小生も、病悴等を引具して当地に来ました。アトには三男が職務上踏みとどまり(コレは交通サーヴィス業日本旅行社で停戦後はナカ〜サーヴィス業繁昌らしく、マ軍第一次駐屯到着の際も、通訳にかり出され、米軍の物も能率、天地の相違あるに喫驚仰天した珍談があります)、一時早大の本間久雄教授夫婦が焼出され同夫人が炊事をしてくれる約束で、拙宅に合流したが、拙宅には他に親類の若者(といつても三四十位)二人有り、胃病とちで、若旦那然たる本間君と若者との食性、トテモ統制が出来ず、八月末本間夫妻は退散、今は男手で、自炊してゐます。小生は、軍部にダマサレて、三四年は山籠りするつもりで、当村に来て見れば、仕事はなし、農耕には非力だし、ソレに土地が来年でないといふので、毎

日狭い室内に多人数鼻つきあはせ、特に病人は成るべく寝せて置く様にして居るのでから混雑御察し下さい、炊事突爐の中に七リンを置いてやるのですがソノ燃料は疎菜で只今農村は薪炭配給なく、自製だから、ペラ棒の闇値、併し山林で拾へば二時間で一日分余は拾へるし、ソレが殆んど無盡蔵にあり、苛政下の闇的存在の人間相手よりは、山林に入れば、樹は聳へ、草は伏し、雲は渡り、風は鳴るとして秩序を少しもたがへず、愉快な処から小生は、七月以来、毎日昔話の爺さんを学び、枯枝集めを日課とし、晴天でさへあれば必ず出かけて居りまた此頃は大ルックサクク二つ、約二時間半乃至三時間で、二分位集め、時には、食用になるキノコを一つ二つとることもあり、八月始めまでは、戯れに「今日も伯夷叔斉をやつてくるよ」と申して出ていつて居ましたが、中旬になると、ホンモノの叔斉にならねばならぬ世の中に急変。小生が先年来、久しく叔斉のマ子<sup>こ</sup>でもしたかつたのも、或は□をなしたのかも知れませんが、誠に何ともやり様なき次第、況んや、かう交つてから、世の中はあかるくなり、我々の生活にも光明といふものが、見られるやうになつたのですから、尚更啞然として、何が何だか分らない気持ちです。当地に來た際、朝夕山水を木の窟で引いたのを引きますので、明治天皇御製を想起し「山水を引いて遊はむ夏なしと、のらして御世の思のぼるゝかな」と柄にもない腰折を、友人への手紙にかいたりし

ましたが、ホントウに明治の御世に生れたことが、いろく〜と感慨を催させます、尚当時の腰折れ、「火の国に生れしをのこ火をさけて、夏も雪見る山に入にけり」、六月頃甲斐駒ヶ嶽の雪が見られました。コレで、当地の生活一般御想像下さい。

さて以上は、近況報告ですが、入村以来、大兄へ一度御手紙差上げんと存じ乍ら御宅ワカラズ、(当地では)、ソレに御安否も知らずソノまゝになつてこの上記の如き間に、賀川君の出馬、小生は大兄が御乗り出しを考へ、或は御すゝめせんかと思つて居ました。大正十年頃、賀川君欧州より帰り、第一声を、大毎が逸早く、あげて貰はんとしたところ、社内に、賀川危嶮人物論ありて、沙汰やみとなり、大兄がその聯絡係をつとめて、馬鹿を見た昔話(小生は当時東日にあり)を思ひ出してゐたのでした。大兄が今度賀川君より聞き得たるところは、小生も是非伺ひたいものです。宮様が来年総選挙までの御つもりでなられるだらうといふことは、小生も想像してゐました。但しそのアトは下院の多数党からといふことになりませうが、今の処では後釜に坐すべき適任者を有する新政党が来年一月までに急造されると思はれず相交らず議員屋(新顔にもせよ)の出馬が総選挙には見られるやうだし、心細いですが、無産党も阿部先生はもう老齡で、コレは人寄せのホラの貝の役目だけではありませんか。そして無産党が往年の闘士が小



工場主になつたにせよ、自由主義と極左の間を行くといふやう方は、小生にはモノ足らぬ気がします。往年の闘將闘士が年をとつたのと、過去二十年近くも、軍部中心の圧迫、悪統制で習ひ性となつて虎が、サーカス用になつていつた様にも思はれ、コレからの難局日本を背負うには、ドウかと思はれる様な気がするので。無論小生は、共産主義者ではなく、共産主義がいくとも思はぬのに、新興無産党の穩健ぶりは、何だか氣ぬけた平野水の感がします。余談ですが、今、小生の心中の矛盾をさらけ出して、大兄のエンリョのない批判を乞います。例の神戸時代に、労働運動が今度のやうな中間的で穩健に行けば、小生は神戸支局を去つても、労働運動に興味と熱とを持続し得たでせう。ソレが後には日本の労働運動と称する共産運動には反感どころか嫌悪を感じるに至つたのです。然るに今度は、新興無産党の穩健ぶりが物足らぬのです。コレは穩健無産党は、實際的なる如くにして実はやがてキツと実現するであらう、日本の新社会状態から遊離する非實際的なものの様な気がするからです。ここで一寸挿話を入れます、神戸時代、鈴木文治氏アメリカ經由で帰り元町辺（相生橋に近いキタナイがや、廣い西洋料理屋の二階らしい処）報告会（午餐）が開かれました、小生は大兄と共に出席、松岡駒吉君が、始めて北海道から出て来たのだといふことを大兄に聞きました。此席上鈴木君はアメリカ土産話をして、ソレから

「此上は血を見るときも、大にやる」といひました。コレは「自己等の血が流される様なことがあつても、」といふ意か、「他の者を実力で以て、流血の惨にあはせても」といふ意か、ハッキリわかりませんが、その時から、小生は労働運動に足ぶみを始めたのです、流石に神戸支局在動中は、「承諾必謹」の如く、一夜で掌を反すことはしませんでした。ソレは、大兄が、止まる処には止まるといふやう方をされて居たのも一因ですが兎に角神戸時代には「警戒」を心中にだけ置いたのでした。ソレが今度は右の如く、穩健物足らずですから、「心中矛盾」に我ながら呆れて居ます、今なら、ドンナ事をいつても「民主的傾向」として、ウシロにはアメリカさんがついてるし、ドコからも睨られないから、大正中頃とは事情がちがうからでせうか。もしさうなら、岡崎鴻吉も卑怯な迎合者流ですね。小生には、或人の一言が、警鐘の如く、小生の歩みに警戒せしめた他の一例があります。コレは大兄には申し上げたことがあると思ひます。日露戦前四五年前から小生は社会主義に共鳴して居ました（その動機となつた最初のものは、片山潜著英国今日の社会）。例の萬朝で非戦論を唱へた連中の演説会に行くと、和歌山の小笠原警至夫といふ人が「力で是非を決するなら、日本の天皇とロシアの皇帝とはいひかねるが、両国の総理大臣が相撲をとつて、勝つた方の言い分を通したらヨイではないか」と云つたのを聞いて、小生は國

体と社会主義者といふことを特に痛烈に考ゆるやうになつたのです。そして社会主義には魅力を感じ乍ら、社会主義者には、大に警戒せねばならぬといった様な感じを抱く様になりましたが、果して、幸徳の大逆事件あり、大正に入つて、明治の理論的社會主義運動は、實際的労働運動となり、運動者即ち労働者といふ処に大に興味と魅力を覚へ、例の「本版」時代、大に大兄のフンドシで、相撲をとつたものでしたがソレが神戸時代に、鈴木君の「流血論」を聞いては、例の非戦論で小笠馨（おがさわら）至夫君の放言を聞いた時に似た感に打たれざるを得なかつたのです。思はず小生の思想的一代記になつて了いさうで恐縮ですが、ソノ小笠原君に十四五年前大阪で逢つた時、非戦演説の話をすると、先生苦笑一番「何しろ若かつたもんですから、今では私は虚業家になつて了ひました」と申しました。何でも和歌山での地主で堂ビルに事務所をもつてるとの事でした。鈴木君は今や、無産運動三長老の外にある存在となり、その仲間の闘士が小工場主となり、穩健無産党だから、コレも小笠原君を思ひ起させます。小生は穩健でなくとも、今度こそ大兄が公然とのり出されても新聞社の関係はなし、社会状勢も交つたし、大に奇策縦横、コン／＼として盡くるなき新機軸を出され、小生は、高見の見物をし乍ら、ソレを、本版時代のやうな気もちで、「秘事」と許り一人ぎめに眺める愉快を想像もして居たのですが、たゞ大兄の健康の点だけは如

何と考へないでもなかつたのです。且「年」の事は全く考へませんでした。無産党に大兄が出馬されぬなら、何か賀川君の片腕になる方面に御のり出しは如何。小生は、今度こそ切にそれを希望し祈つて居ます。新聞社時代には、大兄を新聞社に引とめて置きたかつたのだが、今はその新聞社もなく、大兄を引とめる代りに大兄を天空海闊の新天地に思ふさま活躍さして見たい、(さして見たいは失礼な文字だが、特に御有しを乞ふ)のです。今こそその時機です。是非御奮起は如何。ソウいふなら、貴様はドウだと仰るかも知れぬが小生は新聞以外にも手も足も出ぬ男。己れを知つて居ます。新聞なら今でもいろ／＼案もあります。今の新聞は、もう駄目です。奥村翁が毎日社長をやめたので小生は十何年ぶりで同氏に手紙を出して感懐をもらしたところ。同氏からの返事に「競争もなく、命令のまゝに天降り記事を羅列しつゝありし現在の記者達は、全くニュースのセンスを喪失し、無氣力不勉強の平凡人と化せるは余儀なき次第ですが、今後は是等の人々を根本より立て直し教育せねばならず候。而かも現在の指導者達も既に殆んど虚勢されて記事の大小輕重の判別力なく、小生等の考とは全然遊離しつゝある状態に候。小生が社を去るに至れる一の動機も彼等の考と小生の考とは、全く対立して、最早小生の如何ともすべからざる有様換言すれば、もう小生の出る幕にあらずと見切りをつけたる結果に外ならず候」とあ

りました。新聞界の現状を端的に言い得て居ると思ひます。然るに新聞界の将来は、同盟通信社の特権剥奪にも現はれて居る如く、何れ昔の自由競争の時代が来るでせう。さうすれば、右の毎日社の如き状態の社は後退又後退、ソレに乗じて、とつと代る有力社の出現にはコレ亦数年、数十年を要ませうし、新聞界は、一時の萎靡時代を経て、再生するのではないかと思ひますから、小生が年甲斐もなく、新聞界に対してのみは、まだ案があるといった処で、ソノ新聞界が、もう駄目だから、小生も宝のもちぐされ(御一ハ原文ノマツ)笑) テナわけですね。だから、小生は叔斉のまね位が分相應で、先達で、東京の町の最近の「横文字趣味」を報導した一友人が、小生に対し、「貴下(即ち小生)も社会部長時代には横文字趣味でしたな」とヒヤカして来ましたが昨今の小生はドウ致して同じ降伏の相手方たる「中華民国趣味」で、唐の詩文の釈義(無論日本の学者が書いたものですよ)を唯一の読書として、当地でやつて居ます。もうすっかり観念したものですよ。小生も新聞社時代は、「新聞作り」であつて、書く記者ではなかつたのですが、新聞社をやめると、新聞は作れず書きたくはなく、六十歳頃から、世間には出さないつもりものを、ボツ／＼書いて居ます。後世子孫が見るのがオチですから、すぎ放題に、自己中心で、出生時から、新聞社をやめるまでを書きました。この最後のものは、大兄を始め、友人の手紙も大分引用して

あります。ソレから家蔵の書を読んで得た「亜細亜は一なり」といふ古事から、日本はアジア諸民族の影響を被つて今日の文化を大成したといふ岡倉天心を、通俗で行つて漫談類似のものを、まだ書き終らないまゝになつてゐますが、コレ迄の中で「亜細亜は一なり」が、ドウしても「世界は一なり」になつて行くのです。ソレで追々はソコへもつて行かねば、オサマリがつかないのですが、書いてる頃が空襲下でせう。「亜細亜は一なり」はよいが、「世界は一なり」は禁句の時代です。ソレ故、「世界は一なり」を「八紘為宇」で表現して小室君に読んで貰い、結局「世界は一なり」になるよと笑つたことですが、ソレが、とう／＼ソウならねばならぬことになつたのは、小生としては、帝国の弱小化は別として、決して愉快でないこともありません、ソレから、東京に帰る機会があつたら、今少し勉強して、アトを書き、コレも後世子孫に読ませる程度のもので、極めて大甘ものですが何とか纏めるつもりです。コレから、此春の空襲劇基下に、拙宅にのこれる日記類を点検して、熊本藩のお触れ達し類から見た城下の町家生活の一般を伺ふべきもの「御城下の町人」を書きました。(百枚で、四冊位でしたが)コレは安永度から明治までの拙宅の私生活中心で、コレこそ、拙宅の子孫用の最たるものですが、先月の空襲で、熊本大半焼失、ソノ中に右の町家の舞台だけは大部分残存(といつても、明治時代以後の建築です)して居

るので、旧藩時代の記録として或は世間の役に立つのではないかと思ふ様になつて来ました。モト／＼公表するつもりで書いたのではないのですけれど、もし小生が帰京する機会が来れば、一度大兄にも御笑覧を願つて、一般的に興味を感じべきか否か、卒直な御批評を仰ぎたいと思つてゐます。どうも、私的なことをコマ／＼と書いて恐〇、コレも小生の近況を御知らせする一〇と御察しを願ひます。さて、御配慮を煩はしました病悴のこと、誠に御好意有り難く存じました。コレには小生もホト／＼弱つて居ます。まづ三男（小生の長男は夭折、二男、三男があるのです）の例の日本旅行社にあるのは、もう来年が三十、結婚させねばなりません、昨年四月、日大病院の川島博士レントゲンの結果では結婚はまだイケないといふこと。最も川島さんは非常に嚴重に大事をとる方です。ソノ後三男は別に養生はせず。時局の赴くまゝに烈しい活動をつゞけ、それに堪へる二居る故、余程よくなつたつもりで居ますが、川島サンは此五月から当縣岡谷市病院に日大病院を挙げて疎開し、東京に居ませんから、三男がソノ方の受診が出来ず、別に考へて医者を受診せよ。その結果によつて結婚を急ぐべしといつてやりました。此事では大先輩の大兄の御意見、御助力と何れ帰京の上、願ひたいと思つて居ます。三男は、自炊生活をしつゝ（三人づれで）、相当無理をして居るらしいですが、元氣です。二男の方は、出征中病を得て、昨

年十一月帰還、病名ロクマク、予後は肺シンジュンで、非常に肥満したので、帰郷を命ぜられ、当人全く此病に無経験なところから、肥満を全快近しとも思つたのか、空襲劇甚下、壕を掘つたり何か大労働を行ったので、本年一月下旬、突如九度何分発熱、前々からなかつた方が、乾性ロクマクで、絶対安静、元来なら、拙宅は歴代（？）日大の川島さんですが、アノ空襲下ソレも出来ず同じ隣組に小出といふ医者（博士ですがね）。別に世田谷病院長として私立病院を経営し、自宅（拙宅のトナリ）にも、病室十許りあり、ソノ方の専門なので、此人を主治医とし、拙宅坐敷を見ること病院病室同様で、頻々たる空襲下にも三月下旬までは絶対安静を保ち得、四月になつて、熱も七度以下になつたので空襲の際のみ入壕して居ましたが、空模様は日々悪しくなり、主治医の医院は軍に徴用され、主治医も疎開し、拙宅にも大に疎開をすゝめるので、六月中旬病二男を伴ひ、当地に疎開したこと既記の如くですが高地で空気が清冷のためか、始めは旅行のため、多少の発熱を予期したのに、全然発熱なく、七月下旬までは非常に順調で、六度八九分から六度七八分といふ成績でした。然るに年令が只今三十七といふもう一人前の旦那なので、中々小生のいふ安静を守らず少しよいと畑の草とり（ソレも一回一二時間づゝ、三度位やりましたか）、風呂たきなどをやるので、小生もハラ／＼して居ましたが、八月末から熱のヤ、上り、

六度二三分から六度八九分、時に七度になる事あり、又当地は非常に冷涼風邪をひき易く、ソウいふ場合は七度二分（五日に一遍、一週間に一度）とありますが、無医村同様で縣の診療所はありますが老医七十歳位の何でも屋で、診せる気にはなれず、川嶋さんの疎開せる岡谷は六里位の地ですが、交通の関係で二日がよりでなければ行つて帰れず、いふなれば、宿泊、食物乗り物等病人をつれて行くには余程の準備を要し、まだ二の足をふんで居ます。ソレで富士見療養所は三里位ですから、此方に目をつけ、東日に尋ねてやったのが、大兄の御耳に入り、御好意に浴し有り難く存じます。二男も流石に懲りたと見へ此頃は大部分寝て居ますが食料事情が悪く、病人にも一日一圃はジャガ芋を食はせるの外なき有様、栄養はとれず、段々寒くはなり十一月頃までには帰京しやうと本人は云つて居ます。何分四十近い奴ですから、本人が思ひ当るやうにならねば、何の治療もし悪くくて小生の如き耳目による本病の経験者から見るとハラ／＼する事許り誠に此奴我まゝで、困つて居ます、いつか頂いた白十字の本は時々読んで居るやうです。そして此頃は、白十字のサナトリウムに入らうかなどと云ふこともありますが、気まぐれでアテにはなりません。白十字の療養所については、拙宅のもの、或は友人達のために、大兄を二度も三度も煩はしましたが病人のワガママで、始めは今にも入所したい様に云い乍ら、後に病状が悪くな

つて居ないと療養所の事など知らぬ顔をして、大兄に何度も御手数をかけて恐縮に存じます。今聞も二男がたゞ口頭でソナナ事を申して居つたと申し上げるだけで、いよく本人が衷心から思ひ立つ時までには、小生は実行にとりかゝりません。富士見療養所の事も当人に一色君の返事と大兄の御好意を示しては置きましたが、一向煮へきりません。コレが東京に居るのでしたら、賀川君にでも願かつて、枕頭説教をやつて貰つて大に反省させるのだが、なども此頃は考へる様になりました。ヤハリ子の親としての愚痴です。尚当地に來まして八月頃までは主治医にもらつたカルチコール(?)とビタミンABCなどを注射してゐました(医者には教はつて、ヨメが注射したのです)が、注射箇所が、固くなつたとかで、今ではやめて居ます、注射液はまだある様です。以上、病人の近況と、御好意を感謝して御報告致した次第です、小生十月上旬一寸帰京、もし御面會出来れば幸甚と思ひますが、拙宅電話なほ不通の由、小生は多分五六日頃には帰京し、五日位滞在、またコチラに帰り、十月中旬疎開者で家のあるもの帰れる様になつてから、本式に帰京せねば、当地では冷凍鴻吉になりさうです。御察し下さい。以上近況御報をかね、加此候。乞此上御自愛折角の機会に御活躍奉祈ます。

九月二十九日

岡崎鴻吉

村島大兄

以上、小稿では村島婦之関係書簡の一部である九篇を紹介した。書簡類は、この他、当時のジャーナリズムの中枢にいた人物のものも含まれ、第七代毎日社社長高石真五郎、神田五

## 【新刊紹介】

飯島 吉晴著

### 『笑いと異装』

(一九八五年二月刊 海鳴社モナドブックス 五〇〇円)

笑いや涕泣という身体に深く関わる行為は、特に人類学の分野では多く取り上げられてきた問題である。本書は、この問題について日本の民族儀礼や昔話を中心に考察を進めようとするものである。本書の内容は、著者の既出論文を書き改めたもので、次のように四章に編集されている。

第一章 笑いのフォークロア

第二章 涕泣のフォークロア

第三章 民俗における儀礼的な笑い

第四章 異装のフォークロア

昔話における笑いは、絵姿女房譚に見られるように、主人公の百姓が女房の笑いを契機として殿様になる等の秩序の逆転や転換とい

雄等、見るべきものも多い。それらについては、後日、稿を改め発表したいと考えている。

(関西大学大学院生

う象徴的機能を果たしている。マタギの成年式・沖繩県の「胞衣笑い」などの通過儀礼にも哄笑が伴う。柳田國男が『山の神とラコゼ』で紹介したように、霜月の山の神祭などの季節的祭祀でもオコゼに対する儀礼的な笑いが行われる。これらの笑いは時間的・空間的境界において異界とこの世を媒介する重要な要素であり、場の転換や季節の交替を指し示すものである。又、悪態祭の異名のある三河の花祭にみられるような悪口や、正月に関東一円で行われるドタバイリの行事に伴う儀礼的涕泣、そして成年式などになされる女装や仮装も同様の機能を有するものであるという。

「来年のことを言うと鬼が笑う」というのは日常よく耳にする言葉である。落語の「野崎詣り」は、参詣の途中で悪口を言い合って勝つと一年間の運がよいという俗信がモチーフになっている。このような身近に登場する笑いや悪口も、視点を変えて見ればおもしろいものになるかもしれない。近年、パフォーマンスなど人間の動きが注目されてきているが、さらに身体の内から発現してくる笑いや涕泣の意味を考え直そうとするならば、手始めに本書を一読されてみるのもよいのではないだろうか。

(澤井 浩一)